

# 朱舜水日本来航時の日中文化交流

松 浦 章

## Sino-Japanese Relations during Zhu Shun Shui's Visit to Japan

MATSUURA Akira

Zhu Shun Shui was born in 1600, during the last years of the Ming period in Yúyáo, Zhejiang Province. The ascendancy of the Manchurians in the northeast marks the beginning of a period of continual friction with the Ming imperial armies, as the Manchurians soon invaded the northeastern territories under China's control and began the gradual expulsion of the Ming forces to the south. The Manchurians later established the Qing dynasty and, in 1644, crossed the Shānhǎi Border and entered Peking. After consolidating northern China, they continued their push into southern China with the intention of seizing control of the entire country. During this period of political turmoil, the Ming Dynasty descendants were unable to accept Manchurian control, and established their centre of political power in Nanjing, and thus were known as the "Southern Ming". Zhu Shun Shui cooperated with the Southern Ming political powers in their plans to restore the Ming Dynasty; however, with the failure of this plot, came to Japan. According to the *Nagasaki-shi* 長崎志, in 1659, [Zhu] fled the wars at the end of the Ming Dynasty, came to Nagasaki and has lived there for seven years. In 1655, Mito Kōmon, hearing of his virtuous loyalty, requested the shogunal government to extend permission for Zhu to move to Mito, where he spent the remainder of his life engaged in lecturing. This essay explores the significance of Nagasaki as a window in Sino-Japanese relations and exchange as well as the cultural interaction of this period when Zhu came to Nagasaki.

キーワード：朱舜水 明末清初 日本来航 長崎 文化交流

### 1 緒言

朱舜水は、名が之瑜、字が魯璵、または楚璵であり号が舜水である。彼は万暦二十八年（1600）十月に浙江省の余姚に生まれ、その後の経歴を経て日本の万治二年（1659）に長崎に来航し、安東省庵の援助を得て、寛文五年（1665）以降は水戸で生涯を終えている。<sup>1)</sup>

朱舜水が来日したことを確実に記録したものとして、次の記録が知られる。それは『長崎実録大成』巻十、唐船方來歴之部、長崎渡儒士医師等之事の条に、

---

1) 石原道博『朱舜水』吉川弘文館、人物叢書83、1961年12月。

浙江餘姚縣人 儒士 朱 水

右ハ万治二年（1659）明末ノ亂ヲ避テ長崎ニ渡来、在留七年、寛文五年（1665）水戸黄門公其徳義ヲ被爲及聞召、公儀ニ聘召ノ事ヲ御願アリ、同年七月舜水、其門弟並通譯高尾兵左衛門附添江府へ参上シ、同九月水戸ニ到ル。禮接尤鄭重ニシテ、數年ノ間經史ヲ談論シ、道儀ヲ講究セラレ、厚ク其學オヲ尊信有之。天和二年（1682）四月八十三歳ニテ卒。<sup>2)</sup>

とあるように、朱舜水は、清朝が興起して中国全土を蹂躪した明末清初の動乱を避難するために万治二年（1659）に長崎に来航したとされている。その後、7年あまり長崎に滞在するが、水戸光圀の要請によって水戸に赴き、經学、史学を講じて、尊敬を受けていたとされ、朱舜水の日本での学術的影響に関してはこれまで多くの蓄積がある。<sup>3)</sup>

しかし、その朱舜水が来日した際の日本と中国との交通事情はどのようであったかについては、これまでほとんど注目されてこなかった。そこで本発表において、朱舜水が来日した時期の日中交流の問題に関して述べてみたい。

## 2 万治二年（1659）頃の日中往来

朱舜水が長崎に来航した回数は石原道博の研究によれば七次とされ、その最初が正保元年（1644）であり、そして最後が万治二年（1659）である。<sup>4)</sup> このおよそ15年間に及ぶ時期の中日間の交通事情について述べていきたい。

『長崎実録大成』巻十一、唐船入津並雜事之部により、朱舜水が長崎来航時において中国からの貿易船がどれほど来航していたかを簡単に表示してみる。

1644-1670年長崎来航中国船数表<sup>5)</sup> 表1

西曆	中国曆	日本曆	中国船数	備考
1644	崇禎17年 順治元年	正保元年		
1645	順治2年	正保二年		朱舜水長崎へ赴く（第一次）「自舟山至日本」
1646	順治3年	正保三年		
1647	順治4年	正保四年		朱舜水 長崎へ赴く（第二次）

2) 『長崎文献叢書第一集第二巻長崎實録大成』長崎文献社、1973年12月、245頁。

3) 徐興慶『近代中日思想交流史の研究』朋友書店、2004年2月他参照。

徐興慶「朱舜水思想與徳川儒教發展的關係」、『朱子生誕880年記念国際シンポジウム 朱子学と近世・近代の東アジア——テキストをふまえたアプローチ——』予稿集、関西大学文学部・国立台湾大学人文社会高等学院、2010年9月10、63～69頁。

4) 石原道博『朱舜水』吉川弘文館、人物叢書83、1961年12月、35～54頁。

徐興慶氏も石原説に基づき「浙東の儒学者朱舜水（一六〇〇—一六八二）は、一六六〇年に日本に流寓することを決意する前、東アジア海域の舟山群島、安南、日本の三地域間で、十七年に亘り三角貿易に従事していた。その間、長崎にも七回ほど短期滞在している」（徐興慶『近代中日思想交流史の研究』27頁）とされている。

5) 『長崎文献叢書第一集第二巻長崎實録大成』254～257頁。

1648	順治5年	慶安元年	20艘	
1649	順治6年	慶安二年	59艘	「唐僧蘊謙渡海、福濟寺重開山ト成ル」
1650	順治7年	慶安三年	70艘	
1651	順治8年	慶安四年	40艘	「唐僧道者渡海、崇福寺第三代住持ト成」
1652	順治9年	承応元年	50艘	朱舜水 長崎へ赴く（第三次）
1653	順治10年	承応二年	56艘	「唐僧澄一渡海、以後興福寺中興崇福寺二代住持ト成ル」 朱舜水 安南から長崎へ赴く（第四次）
1654	順治11年	承応三年	51艘	「唐僧隱元和尚渡海、興福寺ニ在住有之」 朱舜水 長崎へ赴く（第五次）
1655	順治12年	明暦元年	45艘	「唐僧木庵渡海、福濟寺ニ在住ス」
1656	順治13年	明暦二年	57艘	
1657	順治14年	明暦三年	51艘	「唐僧悦山渡海、福濟寺ニ在住ス」 「唐僧即非渡海、崇福寺中興開山ト成ル」
1658	順治15年	萬治元年	43艘	朱舜水 安南から長崎へ赴く（第六次）
1659	順治16年	萬治二年	60艘	朱舜水 長崎に渡来（第七次）
1660	順治17年	萬治三年	45艘	「唐僧曇瑞（千獸）渡海、崇福寺第二代住持ト成」
1661	順治18年	寛文元年	39艘	「唐僧高泉直ニ黄檗ニ至リ、第五代ノ継席ト成ル」
1662	康熙元年	寛文二年	42艘	
1663	康熙2年	寛文三年	29艘	正月、朱舜水長崎に滞在。
1664	康熙3年	寛文四年	38艘	
1665	康熙4年	寛文五年	36艘	朱舜水、六月長崎を出発、7月江戸到着。
1666	康熙5年	寛文六年	37艘	
1667	康熙6年	寛文七年	33艘	
1668	康熙7年	寛文八年	43艘	
1669	康熙8年	寛文九年	38艘	朱舜水70歳の誕生を祝われる。
1670	康熙9年	寛文十年	36艘	

備考欄の記述は、石原道博著『朱舜水』吉川弘文館、1961年12月、「略年譜」282～294頁、及び『長崎文献叢書第一集第二巻長崎實録大成』254～257頁参照

以上のように朱舜水が来日したとされる前後15年間における長崎来航中国船の隻数を記したが、後半は清朝が発布した〈遷界令〉の効果もあり、全体的に減少傾向にあった。

朱舜水が長崎に滞在していた記録として、年紀の明らかなものとして次の記録が知られる。「従寛永十六年至寛文三年 古来より御役所引継ニ相成候掟定書之類」「長崎御役所書留」上の目録に、

…朱楚璵與申博学之唐人長崎在留之儀、…相伺候処一々御下知被仰下候事。<sup>6)</sup>

とあり、朱舜水の字である楚璵を誤記され楚璵と誌されたものと思われるが、博学の中国人である朱舜水の長崎在留が許可されたことがわかる。さらに同書上に見える本文の寛文三年八月十九日付の「覚」書に、

一去年罷越候朱楚璵と申博学之唐人有之候。彼者長崎ニ被差置被下候様ニと唐人通事并住宅之唐人捧訴状候事

6) 太田勝也編『近世長崎・対外関係史料』思文閣出版、2007年10月、6頁。なお「王巽」の字は一字であるが、印字に際して表記できないため便宜上「王巽」と記した。

是者一兩年差置其様子次第ニ可仕事。<sup>7)</sup>

とある。寛文三年前に長崎に渡来した朱楚環こと朱舜水が博学の人物であることから長崎での長期逗留を許可されたく長崎の唐通事や滞在を認められた華人等から願いが出され許可されたことがわかる。これは「覚」書の日付より前におそらく処理されたのではなかろうか。

それは次に記す『唐通事会所日録』一、寛文三年正月十五日の記録に、

儒者朱楚嶼（之瑜、號舜水）御禮ニ被罷出候、中間何も同道、獨立（性易、崇福寺）御政所へ御禮ニ今日被罷出候、惣右衛門同道仕、取次申候。<sup>8)</sup>

とあるように、朱舜水が長崎通事の手を煩わせて長崎奉行に謝恩の気持ちを伝えた記録が確実なものである。この謝恩とは先の「覚」書に見える長崎での長期逗留の許可に対するものであったと考えられる。

いずれにしろ朱舜水は寛文三年（1663）以降の日本での滞在が公式に認可されたことになる。しかし彼が長崎に来航した時期の日中の交流はその窓口となった長崎ではどのようなようであったかについて次に述べてみたい。

### 3 朱舜水日本来航時の日中文化交流

朱舜水が7次に渡って日本へ来航したとされるが、その最初は正保二年（1645）とされ、弘光元年乙酉に「自舟山至日本」<sup>9)</sup>と舟山から日本に来航したとされている。梁啓超の「朱舜水先生年譜」においても「先生初至日本、當在乙酉也」<sup>10)</sup>とある。そしてその目的は、「行實」では「蓋先生所以屢至日本者、欲以王翊爲主將鄉導、而借援兵也」<sup>11)</sup>とあるように「日本乞師」であったとされている。<sup>12)</sup>

弘光元年乙酉、正保二年、1645年に舟山より日本に至ったとされるが、その舟山については、次の記事を参考に掲げたい。朱舜水が日本への基点とした舟山であるが、雍正『浙江通志』卷九十五、海防一には、

觀海指掌圖、大洋山北行二更餘至馬蹟山、海中道里以更計。一更九十里。此二山為江浙分汎地、最爲扼要。大衢山雖為浙江洋面、而與大洋馬蹟三方鼎峙、守大洋馬蹟者必守大衢。始臂指相使呼吸可通、馬蹟二更餘、至陳錢山、又一更至盡山、盡山以內為内洋山以外為外洋。順風不三日、可至日本矣。由衢山而東諸山錯列、各有港道、可以泊船、不二更至舟山也。

と記されるように、浙江省の最東端に位置する舟山は、中国大陸から日本への最短距離に地理する位置にあり、当時の帆船では順風を得られれば数日で日本へ赴けた。この舟山を基点に東は日本、南は思明即ち厦門や安南との海上貿易に関与していた可能性は極めて高い。石原氏は、朱舜水が「南海産の香木・

7) 太田勝也編『近世長崎・対外関係史料』52頁。

8) 東京大学史料編纂所編纂『大日本近世史料 唐通事会所日録一』東京大学出版会、1955年2月、3頁。

9) 「舜水先生行實」、朱謙之整理『朱舜水集』下冊、中華書局、1981年8月、614頁。

10) 朱謙之整理『朱舜水集』下冊、655頁。

11) 同書、614頁。

12) 石原道博『朱舜水』38頁。

香料などについても、特別にふかい知識をもっていた」<sup>13)</sup>とされることは、朱舜水の知識は幅広く海外貿易に関与していたとしても何等不思議ではない。

地理的には舟山の位置は明らかであるが、それでは舟山と日本との貿易関係について考えてみたい。

西川如見の『長崎夜話草』巻二、「唐船始入津之事」に、

長崎の津に唐船来りし初めは、永禄五壬戌の年、津の内、戸町といふ浦に到りぬ。そのころまでは唐土も明朝の代にて、いまだ日本渡海をばゆるさざりしかど、海邊村里の商人しのびしのびに船仕たてて、五島・平戸・さつまの浦々に來れる船もありし。荷物は磁器・布木綿・菓葉・砂糖のたぐひのみにて、世の人質素なれば、織物・綾錦の類を持來る事なかりし。<sup>14)</sup>

とあるように、長崎に中国の船が来航した最初が永禄五年（1562）以降としているが、明朝の“海禁”政策があったため、日本に来航する中国船は「しのびしのびに船仕たて」と密航してきたのである。朱舜水が日本に初来日した際も基本的には同様な状況であったと思われる。

明朝が崩壊して清朝が中国を支配するようになるが、台湾を拠点として鄭氏が清朝に抵抗したため清朝は“遷界令”を施行したため、多くの商船は日本への渡航が困難であった。事実、天和元年（康熙二十、1681）十月に来航した南京船が次のように報告している。この船は長崎に来航する予定が九月初めに海難に遭遇して薩摩に漂着して破船となり、薩摩から薩摩の小船によって長崎に送り届けられた。その乗員の「申口」は十月朔日付にて唐通事により翻訳された。

私船之儀も、南京之内、鎮口と申所より、ひそかにしのび候而、今度之船を仕出し申候。<sup>15)</sup>

とあるように、南京とするが、現在の南京としての地名より「南京省」<sup>16)</sup>として清代前期の江南省や後期の江蘇省の意味で南京が使われていた。

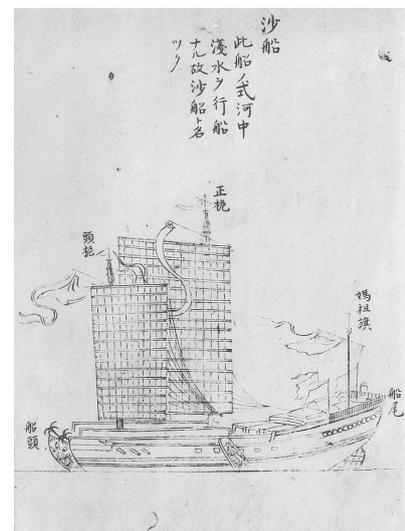
『増補華夷通商考』巻一、南京に、

今長崎に來る南京船と云は、此の河舟を直に乗出し來る也。

此の故に舟の造やう、底平く長き也。何方より吹風にも乗安く妨げ無し。日本に來る船、四季共に之れ有り。<sup>17)</sup>

とあるように、長崎に来航する南京船とは必ずしも現在の南京から来航したのではなく、長江下流域の港から来航する船を総称して南京船と呼称していたことがわかる。以後に述べるオランダ商館記録でも南京船と呼称されているほとんどの船が、このような江南地域からの船を指している。

朱舜水が起点とした“舟山”であるが、『増補華夷通商考』巻一、浙江省に、



13) 石原道博『朱舜水』51頁。

14) 西川如見著・飯島忠夫・西川忠幸校訂『町人囊・百姓囊・長崎夜話草』（岩波文庫）岩波書店、1942年6月、247頁。

15) 『華夷變態』上冊、財団法人東洋文庫、1958年3月、332頁。

16) 西川如見著・飯島忠夫・西川忠幸校訂『日本水土考・水土解弁・増補華夷通商考』（岩波文庫）岩波書店、1944年8月第1刷、1988年11月第2刷、72頁。

17) 『日本水土考・水土解弁・増補華夷通商考』73-74頁。

舟山（ちうさんと唱へきたれり）寧波府の内地、古は蓬莱山と云る由。島山にて小き所なり。今時は此の所より船仕出す事なし。

道規長崎迄海上二百五十里。

普陀山 寧波府の内定海縣に在る島也。補陀落迦山と號す。又は梅岑山とも云。觀音の靈地にて寺あり。出家而已居住す。日本の僧慧萼と云人開基なりとぞ。日本の萬治寛文の頃、日本渡海を禁制せし故、寧波其外所々の府城より船仕出す事叶ひ難き故、舟山普陀山等の小島より密々に舟仕出し來りし者也。<sup>18)</sup>

とあり、舟山と普陀山の地理的状況が記され、ここにも記されるように、萬治寛文の頃とは朱舜水が長崎來航した時期は、先に触れた清朝の“遷界令”が施行されていたため、日本への渡航は禁じられていた。そこで多くの商船が法令を破って密航してきたのである。朱舜水も同様であった。

貞享二年（康熙二十四、1685）三月十八日に長崎に來航した八番南京船は、

南京仕出し之船は、當分は私共船壹艘迄に御座候、…兵難に遭不申所之故にて、爾今商船仕出し之儀、御免し無之候、併此所々漁船湊口迄、出入之儀者御免にて御座候、就夫私共今度之船、漁船に紛しのび出申候、…<sup>19)</sup>

とあるように、この船は操業が許されている漁船に紛れて港を出て日本へ來航したことがわかる。

同様な例は、同年四月四日に來航した十一番普陀山船も、

私共出船仕候普陀山之儀、南京近所に而御座候、海邊之儀に而御座候得ば、惣而前廉より所々海邊之人民共、皆々住居を奥へ被移、海邊之分亡所に罷成申候處に、…然者普陀山近所、并寧波府など申候所々も、尤遠國商賣之船勅免無之候得共、漁船之分は近隣往來心易罷成候、則其所々之守護職よりゆるし手筈なども出申事に御座候に付、漁船に事よせ、私躰之商船も、其守護職之心得を以、仕出し申儀に御座候、今度乘渡り申候船も、右寧波府に居被申候惣兵之官、孫氏之鎮守にたより申候而渡海仕候、…<sup>20)</sup>

とあるように、清朝の“遷界令”が、清朝の支配が浸透してきた地には若干緩和され漁船の操業は認められていた。そこでその漁船に紛れて普陀山を出港してきたのであったことがわかる。

さらに同船は、普陀山に関する情報を提供している。

普陀山之儀、古來より觀音之靈地とて、大明世之時分は、殊之外繁昌之所に而、尤寺宇佛閣奇麗之儀其隱無之所に而御座候處に、大清之世に罷成、海邊之住制止之上、先年阿蘭陀人亂奪仕、旁に付亡所に罷成、出家沙門も無之躰に罷成申候得共、去年より海邊人民之住居勅免により、普陀山も僧共之住居心易罷成申候、…<sup>21)</sup>

とあり、普陀山は古くからの觀音靈場として知られ、明代にも繁榮の地であった。しかし清朝の“遷界令”により普陀山の居住を禁止し、さらにオランダ人による侵攻により不毛状態にあったが、台湾鄭氏

18) 『日本水土考・水土解弁・増補華夷通商考』89-90頁。

19) 『華夷變態』上冊、462頁。

20) 『華夷變態』上冊、465頁。

21) 『華夷變態』上冊、466頁。

が清朝に降ったことで、“遷界令”が緩和されたため普陀山に人々のみならず僧侶も戻ってきたのであった。

この初期の日本渡航頃の長崎の状況について日本側の詳細な記録は皆無に近い。そこで中国商人の長崎貿易に関して商敵として注視していたオランダ商館の記録から、長崎における中国貿易の状況を概観してみたい。オランダ商館の記録は、村上直次郎による翻訳に依拠した。

まず朱舜水が初来日した前年の正保元年（1644）にから正保四年までの長崎の中国貿易に関して、長崎における中国貿易の実情を中心にオランダ商館の記録から列記してみることにする。ただしオランダ商館記録は西暦によって記録されているため、本稿では西暦の年月日によって以下述べたい。

### 【長崎オランダ商館日記】（以下同）

1644年11月3日（正保元年十月四日）

支那ジャンクが三隻出帆した。<sup>22)</sup>

1644年11月15日

本年支那ジャンク五十四隻が、日本の正月一日即ち去る二月八日以後、長崎市場に出した商品及びその価額についての通知を受けた。

當一六四四年支那貿易ジャンク五十四隻が、各地から長崎市場に出した商品及びその価額の覚書

白支那生糸	42,067斤	黄生糸	7,296斤
白綸子	98,220反（中略）	白砂糖	489,800斤（中略）
黒砂糖	849,600斤（中略）	薬品	91,300斤
磁器	6,478箇	支那書籍	一,〇六〇

合計一,五二七,七二二グル、七,四<sup>23)</sup>

1644年11月16日

荒れ模様のため昨日出帆したジャンク一隻は港内に引返した。<sup>24)</sup>

1644年11月19日

支那ジャンクが三隻出帆、また小さい屋根のある三板船風の支那ジャンクが、南京から粗大雑貨を少し積んで到着。<sup>25)</sup>

1644年11月のオランダ商館の記録は、1644年の1年に54隻のジャンク船が長崎に録したことが記録されている。その後、19日には南京から「三板船」のような、おそらく内河を航行することが可能な平底型の船が南京から到着したが、その積荷は特徴的なものではなかったことがわかる。

1644年12月8（正保元年十一月九日）

---

22) 同書、367頁。

23) 同書、372～377頁。

24) 同書、377頁。

25) 同書、378頁。

逆風、支那ジャンク四隻が、約二、〇〇〇貫目の商品を積んで長崎に着いた由を聞いた。<sup>26)</sup>  
12月は4隻のジャンクが来航し約2,000貫目、1隻当たり500貫目の積荷を長崎にもたらした。

1645年3月13日（正保二年二月十六日）

ジャンクが一隻、福州から蘇枋木、紙、しゃあや、胡椒を積んで入航した。<sup>27)</sup>

1645年3月19日

支那ジャンク一隻が、白生糸、しゃあや、りんず、ギレム、きんらん、どんす等八〇〇乃至九〇〇貫の商品を積んで南京から来て、一ヶ月半か二ヶ月後には多い積荷のジャンクが三、四隻来ると言い、同地では大官に積荷に応じて百乃至六百テールを納めれば、自由に日本渡海を許されると話した。<sup>28)</sup>

1645年3月26日

小ジャンクが一隻サンチュウ（漳州か・原注）から麻布、明礬、壺等の評価二箱以上の荷を積んで来航した。<sup>29)</sup>

年が変わって1645年であるが、1、2月の記録は見えず、3月から始まる。3月には3隻のジャンクが渡来し、1隻は福州からそして南京から1隻が来て、もう1隻は漳州から来航したものと思われる。来航地の不明のジャンクがもたらした情報では、南京では大官に100両から600両を納めれば日本への渡海が出来るとのことであった。おそらく大官への賄賂によって海外渡航が可能になったのであろう。

1645年4月12日（正保二年二月十六日）

午後、支那ジャンク一隻、また夜遅くにも一隻が、南京から絹織物、白生糸等銀一二〇箱と評価される多くの貨物を積んで来た。このほかに数日前に明礬、砂糖等少量の商品を積んだ支那小ジャンクが到着した。<sup>30)</sup>

1645年4月20日

正午、ジャンク一隻が、南京から白糸、各種生糸、絹織物等価格六〇〇貫を積んで来た。<sup>31)</sup>

1645年4月27日、28日、29日

三日間に支那小ジャンク三隻が、砂糖、明礬等価格四、五箱の商品を積んで来た。<sup>32)</sup>

4月には南京から3隻が、さらに小型ジャンクが3隻来航した。南京からの3隻はおそらく3月に来航した船のように、大官に賄賂を納めて渡海してきたものと思われる。

26) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』第二輯、岩波書店、1957年1月第一刷、1980年9月第二刷、22頁。

27) 同第二輯、36頁。

28) 同第二輯、37頁。

29) 同第二輯、37頁。

30) 同第二輯、38頁。

31) 同第二輯、38頁。

32) 同第二輯、39頁。

1645年5月2日、4日、7日（正保二年四月七、九、十二日）

支那小ジャンクが三隻、餘り重要でない各種商品、価格六、七箱を積んで入港した。<sup>33)</sup>

1645年5月19日

正午、南京のジャンクが四隻出帆した。<sup>34)</sup>

5月には3隻のジャンクが長崎に入港し、他方南京からの4隻は帰帆している。

1645年6月8日（正保二年五月十四日）

午後、ジャンク一隻南京から、しゃあや、りんず、生糸等評価六〇箱の荷を積んで入港した。他に同様なもの三隻が近日中に来港の由。<sup>35)</sup>

1645年6月11日

南京のジャンクが二隻評価一〇〇箱の貨物を積んで入港、内乱と国王の死亡で、大官に一〇〇乃至二〇〇グルデンを納めれば自由に日本に渡航を許されるので、近く更に多く来るであろう。<sup>36)</sup>

1645年6月26日

福州の小ジャンクが一隻砂糖、麻布、明礬等評価三箱の小量を積んで入港した。<sup>37)</sup>

1645年6月30日

支那船二隻、一隻はサンチュウから砂糖、麻布を積み、他はパタニから胡椒、きやら、沈香、ロホの皮等評価合計十五箱を積んで入港した。<sup>38)</sup>

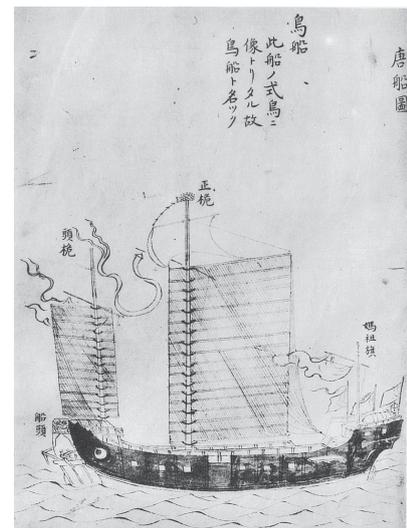
6月には南京から2隻、福州から1隻、おそらく漳州から1隻、マレー半島中東部のパタニから1隻が来航した。11日に来航したジャンクは明朝が崩壊したので、大官に賄賂を納めれば日本への渡航が自由であることを伝えた。明の太祖朱元璋が実施したいわゆる“海禁令”が効力をなくしたことが現実のものとなった。

1645年7月2日（正保二年閏五月九日）

サンチュウ（漳州か）のジャンクが一隻、価格約七箱の砂糖、麻布を積んで入港した。<sup>39)</sup>

1645年7月3日

泉州のジャンクが一隻、主に砂糖など評価約五箱を積んで入港した。昨日と今日と、樟脳二九、七〇〇斤を受取り、



33) 同第二輯、39頁。

34) 同第二輯、39頁。

35) 同第二輯、41頁。

36) 同第二輯、41頁。

37) 同第二輯、42頁。

38) 同第二輯、42頁。

39) 同第二輯、42頁。

大部分包装して片付けた。<sup>40)</sup>

1645年7月7日

支那ジャンクが一隻、泉州から黒砂糖、織物、薬種など価格七箱の荷を積んで来た。同船は去る五月しゃあやその他絹織物を積み、小ジャン二隻と共にタイオワンに行ったというが、我が帆船二隻はマニラ沿岸で、麻布とポイル生糸少しを積んでいる相当大きなジャンク三隻を捕えたが、その中の一隻は後に脱走したという。またマンダリン一官はジャンク二隻をトンキンに出し、タイオワンのオランダ人も同地方に二隻出した由。<sup>41)</sup>

1645年7月13日

ジャンクが三隻、主に黒砂糖評価十一箱を積んで泉州及び付近から着いた。<sup>42)</sup>

1645年7月14日

小ジャンク一隻入港。<sup>43)</sup>

1645年7月16日

夜半、カンボジアの大ジャンク一隻、鹿の皮、蘇枋木、黒漆など評価十二箱の荷を積んで着いた。<sup>44)</sup>

1645年7月23日（正保二年六月一日）

ジャンク二隻、内一隻は泉州から、評価七箱の白砂糖、他は南京から評価十八箱の生糸、しゃあや、ちりめんを積んで入港した。<sup>45)</sup>

1645年7月25日

支那ではタルタル人が日々広い重要な土地を征服し、北京のマンダリンは投降、兵士全部の引渡しを行ったが、タルタル人は去る六月二十三日八十万の軍を率いて南京及び付近の地を占領、更に南方六日程の地まで侵入し、同国最大の河を渡ったので、全土は蹂躪され荒廃するであろう、と支那人が奉行に報告したことを聞いた。<sup>46)</sup>

7月は泉州から6隻、漳州から1隻、カンボジアから前頁の図のような大型船など計10隻が到着した。そして25日には、中国での清軍の攻勢が伝えられ南京もその支配地に陥ったことが長崎に来航した中国人から伝えられている。おそらくこの情報は、上記の10隻の中国系のジャンクの乗員から長崎奉行に伝達され、それをオランダ商館が聞き記録したと思われる。情報源は泉州からか、江南からと思われる小ジャンクの乗員からのものであったろう。

1645年8月11日（正保二年六月二十日）

---

40) 同第二輯、42頁。

41) 同第二輯、42～43頁。

42) 同第二輯、43頁。

43) 同第二輯、43頁。

44) 同第二輯、43頁。

45) 同第二輯、43頁。

46) 同第二輯、43頁。

支那小ジャンクが一隻、福州から評価約六〇貫の荷を積んで来た。<sup>47)</sup>

1645年 8月13日

荒れ模様、小ジャンクが一隻、福州から明礬少しを積んで入港した。タルタル人の支那進出の報は真実で、福州付近は戦争準備を整え、タルタル人に対抗しようとしていると一昨日入港のジャンクが伝えた。<sup>48)</sup>

1645年 8月15日

小ジャンクが一隻、砂糖を積んで福州から来た。<sup>49)</sup>

1645年 8月16日

福州、漳州、安海その他出の十隻からなるジャンクの一隊が、砂糖その他商品の価格五〇〇貫を積んで當地に着いた。最初南京に行く考であったが、戦乱のため當地に変更したのである。タイオワンには砂糖を多く輸入したという。<sup>50)</sup>

1645年 8月20日

本日ジャンクが二隻、福州と漳州から入港。<sup>51)</sup>

1645年 8月21日

ジャンクが二隻、一隻は廣南、他は福州から着いた。<sup>52)</sup>

1645年 8月22日

本日支那ジャンク二隻、一隻は廣東から砂糖、土伏苓を積み、他は廣南から着いた。<sup>53)</sup>

1645年 8月23日

今日漳州からジャンクが一隻入港した。<sup>54)</sup>

1645年 8月25日

夕方、サンチュウ（Sincheo）から支那ジャンクが一隻評価一六〇、〇〇〇グルの荷を持って入港、近日尚二船来る由である。<sup>55)</sup>

1645年 8月31日（正保二年七月十日）

日出前、支那ジャンク二隻、一隻は南京から評価九〇箱の豊富な荷を積み、他はサンチュウ（漳州か）から評価一四箱の砂糖を積んで来た。<sup>56)</sup>

8月には23隻ものジャンクが渡来した。最も多かったのは福州からで6隻を越えている。次いで漳州からは5隻を越え、南京からは1隻であった。そして続々と中国での情報が伝えられ、清軍の南京陥落

---

47) 同第二輯、44頁。

48) 同第二輯、44頁。

49) 同第二輯、44頁。

50) 同第二輯、44頁。

51) 同第二輯、45頁。

52) 同第二輯、45頁。

53) 同第二輯、45頁。

54) 同第二輯、46頁。

55) 同第二輯、46頁。

56) 同第二輯、46頁。

は事実となり、さらに南下して福州方面までもその攻勢が続くと見られている。

1645年9月1日（正保二年七月十一日）

夕、小ジャンクが一隻、福州から評価六箱の積荷で入港した。<sup>57)</sup>

1645年9月3日

夕方、支那船一隻入港。<sup>58)</sup>

1645年9月9日

夕方、ジャンク一隻福州から評価二百貫の荷で入港した。<sup>59)</sup>

1645年9月14日

夕刻、支那ジャンク一隻が廣南から評価九箱の荷を積んで入港した。<sup>60)</sup>

1645年9月21日

夕刻、五島で支那船が三隻、うち一隻は生糸絹織物、他は砂糖を積んでいたが、荷を少しも取出さず沈没したと聞いた。<sup>61)</sup>

9月には4隻のジャンクが入港している。この内、2隻が福州からで、1隻がベトナムの廣南からである。さらに3隻のジャンクが五島列島で難破している。その中の1隻は、荷物を載せたまま沈没したようであった。

1645年10月11日（正保二年八月二十二日）

夕刻、支那小ジャンクが一隻福州から評価十二箱の荷を積んで来た。<sup>62)</sup>

1645年10月25日

正午、小ジャンクが一隻入港した。<sup>63)</sup>

1645年10月26日

本日支那小ジャンク一隻入港。<sup>64)</sup>

1645年10月27日

支那小ジャンク一隻、白生糸その他商品評価二十三箱のものを積んで入港した。<sup>65)</sup>

10月には4隻が来航した。1隻は福州からであり、他の3隻は来航地が不明であるが小ジャンクとあることから江南からの船と思われる。

---

57) 同第二輯、47頁。

58) 同第二輯、47頁。

59) 同第二輯、48頁。

60) 同第二輯、49頁。

61) 同第二輯、53頁。

62) 同第二輯、57頁。

63) 同第二輯、59頁。

64) 同第二輯、59頁。

65) 同第二輯、59頁。

1645年11月16日（正保二年九月二十八日）

福州から一隻評価二箱の明礬を、また一隻は泉州から同じ物を積んで来た。<sup>66)</sup>

1645年11月25日

支那人がジャンク七十六隻で日本の正月即ち我が一月二十八日以降、長崎市場に出した品名と、その賣渡し価額表を今日受取った。

生糸	102,900斤	黄生糸	18,535斤	絹白縫糸	4,406斤（中略）
冰糖	54,800斤	白砂糖	1,770,000斤	黒砂糖	1,553,000斤（中略）
支那書籍	160包（中略）	支那薬種	110,800斤		（中略）
合計	1,482,029グル3スト <sup>67)</sup>				

11月は福州から1隻、泉州から1隻が来航した。これで1645年の1年に来航したジャンクは、76隻で生糸や砂糖が日本へ大量に輸入されている。

1645年12月3日（正保二年十月十五日）

逆風のため有馬領に漂着した福州のジャンクが同領主から當港に送り届けられた。<sup>68)</sup>

12月には有馬領すなわち現在の長崎県に福州からのジャンクが漂着して、有馬当主によって長崎に送り届けられている。この時の有馬当主とは、寛永18年（1641年）に父有馬直純の死去で家督を相続した有馬康純であったと思われる。

1646年4月13日（正保三年二月二十八日）

一月二十六日大坂で聞いたタルタル人の南京占領のため、同地からは生糸を積んだジャンク一隻の外には入港船なく、それに続いて一官からタルタル人との戦に援助を願い出て、奉行権八殿から江戸に報告した、何の効もなかった。

その後各地から着いた船は次の通りである。

福州から九隻、積荷は、白生糸	3,400斤（中略）	合計評価	634貫目
南京から一隻、積荷は、白生糸	25,000斤（中略）	合計評価	790貫目
泉州からの一官の船一隻、積荷は、白りんず	2,270反	合計評価	250貫目 <sup>69)</sup>

1646年4月15日

福州から支那ジャンク一隻入港、積荷は、

白砂糖 25,000斤（中略）合計評価 90貫目<sup>70)</sup>

1646年4月20日

福州からジャンク二隻入港、積荷は、

66) 同第二輯、61頁。

67) 同第二輯、62～66頁。

68) 同第二輯、68頁。

69) 同第二輯、80～81頁。

70) 同第二輯、81頁。

白生糸 1,000斤 (中略) 合計評価 248貫目<sup>71)</sup>

1646年4月22日

午後泉州からジャンク二隻入港。積荷は、

白砂糖 32,000斤 (中略) 合計評価 32貫目<sup>72)</sup>

1646年4月30日 (正保三年三月十五日)

福州からジャンク二隻入港。市場に出す品は、

白砂糖 50,000斤 (中略) 合計評価 54貫目<sup>73)</sup>

1645年の1月から3月までは長崎に来航したジャンクの記録は見られない。4月には福州から14隻、泉州から3隻、南京から1隻の計18隻が来航している。南京からのジャンクが少ない理由として、清軍の攻勢が南京に強力であるため、その影響が少ない福建沿海からのジャンクが顕著であることがわかる。

1646年6月8日 (正保三年四月十六日)

昨年南京から来たジャンクが一隻出帆した。奉行がこれまで度々催促したのに、戦乱を理由として留っていたのであるが、他の三隻も近く出帆するという。商人中重立ったものは現金の大部分を持って當地に留まり、帰る者には南京の事情を調査して再び當地に来るためにその百分の十を渡したという。我らは南京には行かず、泉州、福州または支那の地の他に行くであろうと考える人もある。<sup>74)</sup>

1646年6月12日

南京のジャンク三隻出帆、残るは二隻となった。<sup>75)</sup>

1646年6月17日

昨日入港した一船は今回南京から次の商品を積んで入港した。

白生糸 15,000斤 (中略) 合計評価 655貫目<sup>76)</sup>

支那からは、タルタル人が南京を支配の下に置いた後、頭髪を剃り、とさかのような毛髪のみを残した支那人の乗ったジャンクが入港するようになったが、彼らは人に見られることを恥じて頭巾を被っている。<sup>77)</sup>

1646年6月23日

南京からの第二船が次の商品を輸入した。白生糸 28,000斤 (中略)

合計評価 1,060貫目<sup>78)</sup>

1646年6月26日

---

71) 同第二輯、81頁。

72) 同第二輯、82頁。

73) 同第二輯、82頁。

74) 同第二輯、83頁。

75) 同第二輯、83頁。

76) 同第二輯、84頁。

77) 同第二輯、84頁。

78) 同第二輯、84-85頁。

午後、泉州からジャンク二隻着。積荷は 白砂糖 100,000斤（中略）

合計評価 1,000貫目<sup>79)</sup>

6月になると南京からのジャンクが続々と長崎から帰帆する。しかし南京の事情が判明しないため、貿易で得た金額の10%程度を持って帰帆し、しかも南京にはもどらず、福建沿海に向かうとのことで、清軍の支配地域の事情が十分に情報収集できていなかったようである。そのような中に、南京からジャンクが到来し、清軍による江南支配によって、男性は弁髪という、満洲族固有の髪形を強制させられ、その弁髪の髪形をした乗組員が長崎に初めて来航した。しかし弁髪が目立たないように頭巾を被っていたことが知られる。

1646年7月27日（正保三年六月十五日）

昨夜のジャンクは交趾経由カンボジアから来たもので、積荷は、

鹿の皮 25,000枚（中略） 合計評価 17,000ゲルと聞いた。<sup>80)</sup>

1646年7月29日

午後福州からジャンクが一隻入港。積荷は、

白生糸 3,500斤（中略） 右の評価 300貫目<sup>81)</sup>

7月には交趾を経由してきたカンボジア船と福州からのジャンクの2隻が来航してきた。

1646年8月1日（正保三年六月二十日）

泉州からジャンクが一隻入港。積荷は、

冰糖 20,000斤（中略） 評価 3,400ゲル<sup>82)</sup>

1646年8月6日

南京のジャンク一隻、福州経由入港。積荷は、白生糸 2,500斤（下略）<sup>83)</sup>

1646年8月18日

カンボジアのジャンクが入港。

積荷は、皮 1,500P 鹿の皮 15,000P（中略）

夕刻廣南のジャンク一隻入港、商品は、牛の皮750P 黒りんず200P（下略）<sup>84)</sup>

1646年8月22日

カントンからジャンク一隻入港。積荷は、土伏茶 10,000斤（下略）<sup>85)</sup>

1646年8月28日

---

79) 同第二輯、85頁。

80) 同第二輯、86頁。

81) 同第二輯、87頁。

82) 同第二輯、88頁。

83) 同第二輯、88頁。

84) 同第二輯、89-90頁。

85) 同第二輯、90頁。

本日、福州からジャンクが四隻入港。積荷は、白生糸 5,400斤 (下略)<sup>86)</sup>

1646年8月30日 (正保三年七月二十日)

夕刻、福州のジャンク二隻入港。積荷は、白生糸 3,700斤 (下略)<sup>87)</sup>

8月に長崎に来航したジャンクは、福州から6隻が、南京、泉州、広東、カンボジアから各1隻が入港した。このうち南京船は、福州に寄港して長崎に来航したことから、南京が清軍の攻勢で積荷が集荷するのが困難な状況が想定された。

1646年9月5日 (正保三年七月二十六日)

小ジャンク三隻カンチェオから到着。積荷は、砂糖 120,000斤 (下略)<sup>88)</sup>

1646年9月8日

夕方廣南のジャンク一隻入港。積荷は、蘇枋木 30,000斤 (下略)<sup>89)</sup>

1646年9月10日

先頃貿易を禁ぜられたタルタル風に剃髪した南京人は、今回だけ貨物の販賣を許され、再び渡来することを禁ぜられた。<sup>90)</sup>

1646年9月12日

夕刻、支那ジャンクが二隻入港。積荷は交趾からの一隻、蘇枋木 40,000斤、(中略)福州からの一隻、白生糸 350斤 (下略)<sup>91)</sup>

1646年9月24日

南京の剃髪船員乗組の船二隻出帆。<sup>92)</sup>

9月に来航したのはカンチェオから1隻、広南から1隻、交趾1隻、福州1隻が長崎に到着した。さらに弁髪(剃髪)の髪形をした乗員が搭乗した南京船が貿易を許可されて帰帆している。

1646年10月16日 (正保三年九月八日)

本日福州から一隻と南京から一隻、ジャンクが入港したが、両船共乗組員が頭を剃っているゆえ前例通り貿易は許されぬであろう。<sup>93)</sup>

1646年10月27日

當一六四六年にジャック五十四隻で順次長崎に輸入された商品

白生糸 86,600斤 黄生糸10,400斤 絹縫糸 1,350斤 (中略)

---

86) 同第二輯、91頁。

87) 同第二輯、91-92頁。

88) 同第二輯、94頁。

89) 同第二輯、95頁。

90) 同第二輯、96頁。

91) 同第二輯、97頁。

92) 同第二輯、98頁。

93) 同第二輯、101-102頁。

支那薬種 106,700斤（中略） 白砂糖 799,500斤 冰糖 145,500斤  
黒砂糖 258,100斤 明礬 238,800斤（中略）  
計 852,741.35<sup>94)</sup>

1646年10月31日（正保三年九月二十三日）

今日福州のジャンク二隻入港。<sup>95)</sup>

10月に長崎に入港したのは、福州から3隻と南京から1隻である。この時期に来航したジャンクの乗員はほぼ弁髪（べんぱつ）の髪形となっていたことがわかる。1646年には54隻のジャンクが生糸や漢方薬剤、大量の砂糖類をもたらしている。

1646年11月2日（正保三年九月二十五日）

先頃会った一商人が通詞同伴で来訪、タルタル人となった南京人たちが、長崎来航を禁ぜられたゆえ、今後タイオワンで貿易を行う許可の證として、国旗と渡航免許の交付を望んでいる旨を伝えたので、南京人から、右の商人と通詞を證人として誓約書をだすことを条件として、奉行の承認を受けることにした。（ウイルレム・フェルステーヘンの日記）<sup>96)</sup>

1646年11月5日

南京人の願いについて通詞と協議した上、南京人は出帆後悪天候のため五島でジャンク一隻を失い、近く航海を続けるが、悪天候の際の避難する所はタイオワンの外にないゆえ、オランダ商館長の書簡と公爵旗との交付を望んで来たので、奉行の承認を願うと言わせた。奉行は、彼らが長崎来航を禁ぜられたゆえ、タイオワンのオランダ人と貿易を行うことは尤もなことであるが、考慮の上沙汰するであろうと言った。南京省はタルタル人に占領され、支那は征服されたが、同国民は軽快な船で長崎に来て、生糸と絹織物を賣って短期間に大きな利益を収めていた。彼らはタルタル国の臣民になって頭は剃ったが、その目は常に日本に向けられている。併し日本人は我らの暦の一二八一年、四千の船と二十四萬の兵を率いたタルタル人に博多の海岸を襲われた事が歴史に載せてあり、荒天のため敵軍全滅、日本は少しも害を被らなかつたが、彼らと交わることを好まず、その臣民には貿易を許さず、今回だけ南京船の商品を金銭に換えることを許したのである。<sup>97)</sup>

1646年11月6日

通詞一同が来て、奉行が南京の支那人との件には関係せず、渡航免許や国旗の交付は商館長の考次第であると答えた旨伝えた。<sup>98)</sup>

1646年11月9日

小ジャンクが数隻来た。一官の使者も近く来るので、回答を與えるために、大官が数人江戸から

94) 同第二輯、103-109頁

95) 同第二輯、112頁。

96) 同第二輯、113頁。

97) 同第二輯、114頁。

98) 同第二輯、115頁。

下って来るという噂がある。福州船一隻と南京船二隻が出帆した。<sup>99)</sup>

1646年11月10日

福州のジャンクが一隻腐敗しかけた砂糖を積んで入港、一官は福州から三、四人の使者をタルタル人の許に遣わして協定を求めたが、タルタル人は一官が降伏して頭を剃ったら、廣東・福州・泉州三省のマンダリンにすると答え、彼が承知しなかったので、タルタル軍は突然福州に侵入し、一官は国王と共に泉州に逃げたという。それで使者来航の噂も消え、奉行は宮廷に急使を發した。<sup>100)</sup>

1646年11月17日

正午頃通詞が来て、我らの輸入品の仕入れ地を尋ねたので、支那とオランダとが大部分の供給地であると答えた。これは支那人の来航が絶えても、支障はないか調べたのである。<sup>101)</sup>

1646年11月23日

夕刻福州船一隻入港。<sup>102)</sup>

1646年11月24日

南京の小ジャンク一隻入港。<sup>103)</sup>

1646年11月27日

福州の小ジャンク一隻出帆。<sup>104)</sup>

1646年11月28日

支那ジャンク五隻出帆。<sup>105)</sup>

1646年11月29日

支那ジャンク四隻出帆。南京のジャンクの乗組員の中、四、五人が、支那ジャンクに乗ってトンキンか交趾に行くことを願ったが、奉行は許さなかったと通詞が話した。<sup>106)</sup>

11月には、清軍の勢力の拡大によって貿易商人達が苦慮していた。長崎での貿易存続が困難になると、その代わりにタイオワンでオランダとの貿易存続を企図していたことが知られる。しかもオランダ側は、それを長崎奉行に承認を求めている。商館日記に「南京省はタルタル人に占領され、支那は征服されたが、同国民は軽快な船で長崎に来て、生糸と絹織物を賣って短期間に大きな利益を収めていた」とするよう、ここで言うタルタル人と「日本人は我らの暦の一二八一年、四千の船と二十四萬の兵を率いたタルタル人に博多の海岸を襲われた事が歴史に載せてあり」とする元寇、すなわちモンゴル人の元朝の日本侵攻をおこなったモンゴル人とを同一視していたことである。

この11月には福州からのジャンクが2隻、南京からののが2隻、他に9隻のジャンクが帰帆した。入港

---

99) 同第二輯、115頁。

100) 同第二輯、115頁。

101) 同第二輯、117頁。

102) 同第二輯、118頁。

103) 同第二輯、118頁。

104) 同第二輯、118頁。

105) 同第二輯、119頁。

106) 同第二輯、119頁。

したのは福州から2隻と南京からの1隻のみであった。

1646年12月1日（正保三年十月二十四日）

南京の小ジャンク一隻入港。<sup>107)</sup>

1646年12月2日

南京のジャンク乗組員中数人は今日福州のジャンクに乗込むことを許可されて出発。先ず澎湖島に行き、希望の所にいかねばトンキンに渡る予定である。<sup>108)</sup>

1646年12月5日

福州の小ジャンク南京の支那人数人を乗せて出帆。彼らは澎湖島に着いて、故郷の事情を聞くまで待ってトンキンに行く予定。<sup>109)</sup>

1646年12月9日

奉行は昨日福州の小ジャンク二隻に二日以内に出港を命じた。<sup>110)</sup>

1646年12月10日

南京のジャンク一隻入港。<sup>111)</sup>

1646年12月11日

昨日の南京船はパスミン一官のであるが、戦争のため彼の居住地には入港ができず、當地に来て自分はタイオワンに渡り、乗組員の一部は他のジャンクでトンキン・交趾或はカンボジアに行かせるという。<sup>112)</sup>

1646年12月27日

ジャンク一隻出帆、トンキンに行くものと思われる。<sup>113)</sup>

1646年12月28日

通詞孫兵衛から陛下が支那人には、髪を剃ったものも剃らないものも、同様自由に入国して貿易を行うことを許されるとの知らせがあった。南京人の入国禁止はタルタル人の信仰が判らなかったため、キリシタンでないことが明らかになって許可されたのであると話した。<sup>114)</sup>

12月には南京からの2隻のジャンクが入港する一方、5隻のジャンクが長崎から帰帆した。徳川幕府は弁髪の人々に対しても貿易を許可したことが、オランダ側にも伝えられた。これまで許可しなかったのは彼等の信仰が不明であったためとされた。

---

107)同第二輯、120頁。

108)同第二輯、120頁。

109)同第二輯、120頁。

110)同第二輯、120頁。

111)同第二輯、120頁。

112)同第二輯、121頁。

113)同第二輯、121頁。

114)同第二輯、121頁。

1647年1月3日（正保三年十一月二十八日）

福州のジャンクが一隻入港。福州人は降伏の決心をして頭を剃っていたが、北京から帰った一部隊長が彼らに説いて途中に要塞を築き、地雷を敷設してタルタル人と帰順者約千人を殺したので、福州は同船の出帆までは攻撃を受けなかったという。同船の積荷は、生糸600斤 各種薬品1,000斤（下略）<sup>115)</sup>

1647年1月には福州からのジャンク1隻が到着し、福州も清軍の配下に入ったことが伝えられた。しかし一部にはそれに肯んぜず抵抗していたことも知られる。

商館日記は1646年12月から1647年3月下旬まで商館長ウイルレム・フェールs テーヘンの江戸参府のための記録となる。

1647年3月21日（正保四年二月十七日）

京都で聞いた福州船の外には入港した船はなかった。<sup>116)</sup>

1647年3月24日

新乙名から支那小ジャンク船五隻が十五箱から二十箱の資本を積んでトンキン向け出版したことを聞いた。

とあるように、長崎入港のジャンクは僅少の1隻であった。そして帰帆する5隻は、中国本土ではなくトンキンに向けて出航したのであった。

1647年4月21日（正保四年三月十七日）

復活祭日、ジャンクは今日まで一隻も入港せず、このままであれば会社は損害を被らぬであろう。<sup>117)</sup>とあるように、中国からのジャンク船が1隻も渡来しないことはオランダ東インド会社にとって、長崎の貿易を円滑に進める上で最上の条件であった。

1647年5月13日（正保四年四月九日）

午後南京の支那ジャンクが入港し、島の側を通る時に乗組員約百人を数えたが、皆頭髪を剃っていたのでタルタル人の臣民と認められた。<sup>118)</sup>

1647年5月14日

今朝ボンジョイが前記の船に行って、乗組員に衣服を脱がせて身体検査をした後、上陸を許した。積荷は次の品である。

白生糸 6,500斤 りんず 477P はぶたえ 2,438P

115)同第二輯、122頁。

116)同第二輯、157頁。

117)同第二輯、158頁。

118)同第二輯、159頁。

しゃあや 2,574P（中略） 薬種 535包 雑貨 22箱 綿 30斤<sup>119)</sup>

右の品を売れば合計千テール入りの箱四十五、六箇となり、七カ町の仲介料一町三〇〇テール合計二一〇〇テールは貧しい市民の大きな救恤となるであろう。

支那全国はタルタル人に征服され、老一官は捕らえられて北京に送られ、その子は船四百隻を率いた海に逃れたと伝えられる。<sup>120)</sup>

1647年 5月15日

福州船らしいジャンクが三隻いろいろな色の旗を揚げて入港した。まだタルタル人に服従せぬ福州付近の地方から来たので、近日使節船が一隻来る筈であるという。船には番船が付けられ、乗組員の上陸は許されない。また積荷は殆ど価値のないものである。<sup>121)</sup>

1647年 5月18日

使節を乗せたジャンク船が着いた。大使は福州の長官の弟ということであるが、婦人数人と、ろば二頭、水牛三頭と国風の公式乗用車をのせて居り、通詞が船に行った時には甲板でいすに坐り、二人の男に天蓋を捧げさせ、通詞の身分が低いというので話は船頭が代ってしたという。船では朝、国旗を掲げる時と夕降す時にモスケット銃を発射し、また奏楽した。タルタル人は遠くまで侵入し、日本人は強いものを支持するゆえ、彼は何事もなし得ぬであろう。<sup>122)</sup>

1647年 5月20日

福州のジャンク四隻は陸には一人も上らず、出帆の準備を始めた。砂糖を米八十俵その他食料と交換し、大使は悲しみの様子もなく、また渡来の目的を達しても喜びを見せそうもなかった。<sup>123)</sup>

1647年 5月21日

前記四隻のジャンクが出帆したが、湾の口から外に出られず碇泊した。<sup>124)</sup>

1647年 5月24日

日出の頃使節一行は出帆し、ろばと水牛は進物ともせず陸に上げられた。<sup>125)</sup>

1647年 5月27日

前記の使節は一官の子の遣わしたもので、彼は約三百隻の船を率いて南澳付近に逃げたとも言われるが、確実なことは分らぬ。支那通詞もオランダ通詞も日本に害のあることは一切外国人に話さぬという誓を立てているからである。彼らはオランダ人とその他外国人を疑って居り、在留を許しているのは貿易の利益と恐怖とのためであることを忘れてはならぬ。<sup>126)</sup>

1647年 5月29日（正保四年四月二十五日）

---

119)同第二輯、159-160頁。

120)同第二輯、159-160頁。

121)同第二輯、160頁。

122)同第二輯、159-161頁。

123)同第二輯、161頁。

124)同第二輯、161頁。

125)同第二輯、161頁。

126)同第二輯、161頁。

一官の子はその弟と小ジャンク七百隻と多数の兵を率いて澎湖島に行き、多額の金銭と物品とを携えた富商が多数同行したと伝えられる。タルタル人は一官がその子を帰順させれば彼を釈放して高職に就かせるといった由。彼が日本から迎えた夫人は死亡した。

南京から来たジャンクは、江戸からの貿易許可を持っているが、輸入貨物を賣って貴国するまでには相当の日数を要するであろう。またそのための進物とタルタル人城主に払う金銭三箱と、長崎市民への二十貫目に、滞在中の諸費を加えれば相当の額となって驚くであろう。同船の船頭は少しオランダ語も話し、オランダ人が南京に行けば貿易は必ず許され、生糸が安く得られるであろうと言った。<sup>127)</sup>

1647年5月には、貿易船ではなく、徳川幕府と外交交渉に関する問題を持った船舶が福州から来航した。この船は「一官の子」すなわち鄭芝龍の子供である鄭成功が派遣してきた船であった。この派遣の目的は、石原道博氏が指摘される「日本乞師」<sup>128)</sup>と思われる。

これより先に鄭芝龍からの乞師があり、幕府の態度としては『大猷院殿御實紀』卷六十五、正保三年十月十六日の条に、

御座所にて酒井讃岐守忠勝、松平伊豆守信綱、阿部豊後守忠秋、阿部対馬守重次をめてして議せらるるむねあり。明國より平戸一官書簡を奉り、援兵を請ふことによりてなりとぞ。(この平戸一官とよびしは鄭芝龍が事なり)。<sup>129)</sup>

とあり、幕府は既に鄭芝龍からの援兵の要請を閣議に取り上げていた。その結論は、同書、十月二十日条に、

これよりさき一官援兵を請て、書簡をささぐといへども、その仔細いぶかしげなれば、長崎へ御使をたてられ、一官が書簡持来りし使に、其事状をくはしくただし問れんとせられしに、こたび長崎より注進に、韃靼福州を攻とり明主既に殂し、一官も韃靼に降参したるよしなり。彌さならんには、援兵を遣はされんよしもなければ、この議をとどめらるる旨、老臣仰を諸大名に傳ふ。<sup>130)</sup>

とあるように、福州が清軍の攻勢に陥落した等の状況から判断し、結果的には援兵の意向は無いとの結論であった。

1647年7月2日（正保四年五月三十日）

南京船の支那人は白生糸を昨年パンカド値段で売った。<sup>131)</sup>

1647年7月6日

夜ジャンクが碇泊所に着いた。<sup>132)</sup>

1647年7月7日

127) 同第二輯、161-162頁。

128) 石原道博「鄭芝龍父子に日本乞師」、『日本乞師の研究』富山房、1945年11月、28~75頁。

129) 黒板勝美・國史体系編修會編輯『新訂増補国史大系 徳川実紀第三編』吉川弘文館、1981年11月、458頁。

130) 同書、459頁。

131) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』第二輯、163頁。

132) 同書、第二輯、163頁。

昨夜の船は昨年カンボジアを出て、交趾に立寄り、當地に来たものであるという。正午ジャンク二隻入港。一隻は南京の河を下り、海岸から約四十五マイル、大きな四國程のソンチョウ島から来たが、同所にはタルタル人に服従せぬ富商が多数避難しているという。別のジャンクも同じ島から来て、多数の旗や小旗を揚げ使節を載せているが、上陸をゆるされず、帰航免除を與えられ風を待っている。<sup>133)</sup>

1647年7月9日

前記の使節船の僚船と思われるジャンクが一隻着いたが、上陸は許されず使節船とともに帰る筈である。<sup>134)</sup>

7月に「南京の河を下り、海岸から約四十五マイル、大きな四國程のソンチョウ島」から来航したジャンクであるが、おそらく長江口の崇明島と思われる。そこには多くの富商が清軍の攻勢を避けて避難していたことが知られる。

1647年8月2日（正保四年七月二日）

支那使節船は二隻共天明神前神崎まで出て、最初の機会に出帆しようとしている。<sup>135)</sup>

1647年8月4日

午後の半頃ジャンクが一隻港外に見え、夕刻碇泊所に着いた。<sup>136)</sup>

1647年8月6日

昨夜のジャンクはトンキンを第六月十二日に出帆したが、そのずっと前にオランダ船が一隻出帆したと言った由、トンキンでは何物も高価で、金は百斤六十匁であったという。<sup>137)</sup>

1647年8月7日

朝、漳州の小ジャンクが一隻剃髪した支那人を乗せて碇泊所に着いた。<sup>138)</sup>

1647年8月9日

トンキン船が一隻入港。<sup>139)</sup>

1647年8月10日

正午過ぎにジャンクが二隻剃髪した支那人を乗せて漳州から来た。同所からは他の船も来る由で、商品の價は下落するであろう。

支那は全国タルタル人に征服されたという。<sup>140)</sup>

1647年8月11日

---

133)同書、第二輯、163頁。

134)同書、第二輯、163-164頁。

135)同書、第二輯、168頁。

136)同書、第二輯、169頁。

137)同書、第二輯、169頁。

138)同書、第二輯、169頁。

139)同書、第二輯、170頁。

140)同書、第二輯、170頁。

漳州と交趾からジャンク四隻が入港し、…<sup>141)</sup>

1647年8月13日

ジャンク一隻が入港。<sup>142)</sup>

1647年8月26日

午後、交趾のジャンクが一隻港外に着いた。<sup>143)</sup>

1647年8月27日

夕刻交趾のジャンク入港、積荷は、

ポーヘン 1,000斤 白りんず 666P チッタウ 2,900P 鹿の皮 2,000P

黒りんず 3,480Ps その他<sup>144)</sup>

1647年8月28日

昨日入港した交趾のジャンクから揚げた鹿の皮は、奉行の命令で乙名と通詞から我らの許に送られ、上士二人外数名の委員が何處からの皮であるか鑑定することになり、諸船（オランダ船であろう）から二人を選んで出したが、バタビア、シャム、交趾または臺灣の皮でないと決定し、マニラで買入れた嫌疑で販売を許されず帰航を命じられるであろう。

泉州の小ジャンクが二隻入港。積荷は

白生糸 9,550斤 白砂糖 40,700斤 麻布 585,000斤

同船では、オランダ人が六月二十日にはマニラ湾口のカビテ城を占領するであろうと言っている由。<sup>145)</sup>

8月になると中国全土が清軍の配下に入ったことが伝えられ、オランダ人が「タルタル人」とする満洲族の支配する清朝中国の時代になったことが明確な事実であることが確認されたのである。

1647年9月1日（正保四年八月三日）

南京からの第二船が、

白生糸 5,350斤 ギレム 457反 黄生糸 200斤 シャあや 412P

はぶたえ 250P りんず 752P

を積んで来た。<sup>146)</sup>

1647年9月5日

交趾からの大ジャンク一隻入港、積荷は皮と蘇枋木である。<sup>147)</sup>

1647年9月14日

---

141) 同書、第二輯、171頁。

142) 同書、第二輯、171頁。

143) 同書、第二輯、174頁。

144) 同書、第二輯、174頁。

145) 同書、第二輯、175頁。

146) 同書、第二輯、176-177頁。

147) 同書、第二輯、178頁。

夕刻前五市の年寄たちが町年寄らと来て、生糸の輸入の少ない理由を尋ねたので、支那の事変のためであると答えたが、彼らは今後できるだけ盡力するように勧め、我らはそれを約束した。<sup>148)</sup>

1647年9月19日

泉州から小ジャンクが一隻着いたが、積荷は価値の少ないものである。<sup>149)</sup>

1647年9月23日

漳州船一隻入港。<sup>150)</sup>

9月に長崎に来航したジャンクは南京、交趾、漳州のみでいずれも顕著な積荷ではなかった。そのため長崎での生糸取引もオランダ側に苦情が長崎会所の年寄等から言われる状況となっていた。オランダ側では、生糸輸入の減少の理由として中国での「事変のためである」と返答したように、明末清初の混乱が長崎貿易に影響していた。

朱舜水が日本で定住することになった直後の中国の状況が、徳川実紀『嚴有院殿御實紀』卷二十一、寛文元年（1661）六月二十四日の条に見える。

長崎より注進せしは、此四月二日、先年本邦に住居せし鄭成功、臺灣の地をせめ取て、かの地住居の蘭人をも伐取、またことし入貢の蘭船をもかすめんとす。よて蘭人等、或いは海に入あるは逃去、わづかに二艘崎嶇までのがれ來りしとぞ。<sup>151)</sup>

とあり、鄭成功による臺灣占拠が伝えられた。そのためオランダ船は長崎まで逃れたとあるが、そのことを裏付ける記録が『長崎実録大成』卷九、阿蘭陀船入津並雜事之部、寛文元年の条に見える。

入津二番船、三番船ハ臺灣ヨリ追出シシ由、當表ニ着船。其内女阿蘭陀三十二人有之。<sup>152)</sup>

とあり、鄭成功による台湾侵攻によって台湾から退去したオランダ船が台湾に居住していた婦女32名を長崎に連れ渡ったのであった。

#### 4 小結

朱舜水が日本に渡来したとされる初期における長崎での貿易等の状況を、主にオランダ商館日記を参考に述べてきた。朱舜水が中国と日本と安南とを結ぶ三角貿易に関与したとされる時期は、明朝が崩壊し復明運動の中心人物であった鄭成功が台湾からオランダ勢力を駆逐して台湾を支配するまでの時期に相当する。

この時期に長崎に来航した中国や東南アジアからのジャンクの動静は、オランダ商館日記によって克明に記録され、これらの記録から中国国内において政変による様々な混乱が生じていたことがわかる。その典型的な例がジャンクの乗組員の髪形である。商館日記に「タルタル人が南京を支配の下に置いた

148)同書、第二輯、178-179頁。

149)同書、第二輯、180頁。

150)同書、第二輯、180頁。

151)黒板勝美・國史体系編修會編輯『新訂増補国史大系 徳川実紀第四編』吉川弘文館、1981年11月、388頁。

152)『長崎文献叢書第一集第二卷長崎實録大成』長崎文献社、1973年12月、217頁。

後、頭髪を剃り、とさかのような毛髪のみを残した支那人の乗ったジャンクが入港するようになったが、彼らは人に見られることを恥じて頭巾を被っている」(1646年6月17日条)とか、「タルタル風に剃髪した南京人は、今回だけ貨物の販賣を許され、再び渡来することを禁ぜられた」(1646年9月10日条)とあり、そして「髪を剃ったものも剃らないものも、同様自由に入国して貿易を行うことを許されるとの知らせがあった。南京人の入国禁止はタルタル人の信仰が判らなかつたため、キリシタンでないことが明らかになって許可された」(1646年12月28日条)とあるように、日本側も対応に苦慮していた様子が見える。このように具体的には、満洲族が漢人に強制した薙髮制である弁髪は見た目には直ちにわかり、それら弁髪姿の貿易商人や船員をどのように扱うかなどの長崎側の混乱振りが生き生きと描かれている。このような状況下に朱舜水は長崎に貿易のために初来航したものと思われる。

朱舜水が、しばしば日本や安南におもむいた理由として、貿易のためであったかも知れないが、梁啓超の「朱舜水先生年譜」において「蓋先生初亡命日本、彼中海禁方嚴、不容外人、故轉徙至安南也」<sup>153)</sup>と指摘するように、日本において外国人が長期にわたって滞在することが許可されなかつたことによるであろう。事実『長崎オランダ商館日記』1644年6月14日(正保元年五月十日)の条<sup>154)</sup>から、長崎に来航したジャンクは50日を日限として帰帆させられた。すなわち当然その船の乗員も最大50日の滞在しか認められなかつた。このため朱舜水も日本で滞有効期限が切れた場合、中国へ戻るか他の国へ行くしかなかつたであろう。

「舜水先生行實」に「自舟山至日本、轉抵交趾」<sup>155)</sup>とあるが、これが事実だとすれば、日本で滞有効期限が切れる直前、長崎から交趾に帰帆するジャンクに搭乗したことも考えられる。そうすると上記のオランダ商館の記録から、朱舜水の来日と帰国の可能性が最も高いと考えられるのが次の二例である。

1645年(正保二)に長崎に来航したジャンクで、交趾と航路の上で関係がありそうなのは、7月18日(閏五月二十五日、弘光元年乙酉六月二十五日)に長崎に来航したカンボジアからと、9月14日(七月二十六日、弘光元年乙酉七月二十五日)に来航した廣南<sup>156)</sup>からのジャンクの二隻である。他は南京からと福建などのジャンクで占められている。

6月8日(五月十六日、弘光元年乙酉五月十五日)には南京からのジャンクが、7月14日(閏五月二十二日、弘光元年乙酉六月二十一日)には来航地は不明であるが小ジャンクが長崎に入港し、7月14日にカンボジアからの大ジャンクが入港している。次は同年の9月3日(七月十三日、弘光元年乙酉七月十四日)に来航地不明の「支那船一隻」が入港し、9月14日に廣南からのジャンクが入港してきた。

このことから考えて、朱舜水は南京からのジャンクで渡来し、滞在期間が切れる直前にカンボジアま

153) 朱謙之整理『朱舜水集』下冊、656頁。

154) 村上直次郎訳『長崎オランダ商館の日記』第一輯、315～317頁。

155) 朱謙之整理『朱舜水集』下冊、614頁。

156) 『増補華夷通商考』巻五、交趾に「一國ノ總名ヲ交趾ト云、日本ニ來ル船ハ、此國ノ内廣南ト云處ヨリ來ルヲ交趾船ト云也。廣南ハ今ノ城下ト見ヘタリ。安南國ト云モ此邊ノ總號ト見ヘタリ」とある。また貞享三年七十三番廣南船(七月十二日長崎入港)も「廣南之與之國に占城と申所に遙々罷越、伽羅并鯨之類、少々相調、又々御貴國へ爲商賣、先月二十日に廣南を出船」(『華夷変態』上冊、609～610頁)とあることから明らかなように廣南船はベトナムから来航していた。

たは廣南のジャンクで交趾に赴いたとする可能性が考えられる。

以上のように朱舜水の来日に関する確実な証拠は明らかに出来ないものの、おそらく長江口付近で多用される平底型海船の沙船に搭乗して長崎に来航したものと考えられる。舟山から南の海域に位置する安南との交易には水深の深い海洋に適した尖底型の海船を利用したものと考えられる。

**【附記】**

本稿は2010年11月5-6日に台湾大学において開催された「朱舜水與東亞文明發展國際學術研討會」（台湾大学文学院主催）において報告した（6日）原稿に基づいたものである。

